

本阿弥光悦・光由の周辺

池 原 鍊 昌

(一) 日定上人と光由

昭和五十二年、自坊、光由山・本浄寺（山梨県南巨摩郡増穂町字最勝寺）で古い過去帳がみつかった。左のように記載してあった。

本阿弥光由は定師（註。日定上人は光由山開山で、本山・小室山妙法寺廿世）資縁の檀那たるに依って、菩提の爲、光由山・本浄寺と名づく。定師は慶安年中、当院に御退院

然るに明治三十六年二月二十三日付の光由山記録によると、寺号生起については前文と異なることが誌してある。

開山、喜見院日定上人、寺号を命ずるに凡そ人の本有清浄心の帰する処、寺にあり。今、村民、其本有清浄心より建立せる寺なるか故に本浄と言ひ、已後、広く妙法の光由を宣説し国家安穩を祈るの道場なれば光由山本浄寺と名けり。

右記載は本浄寺の「由緒并財産調書」として役所へ提出した公文書の「控」である。

この本浄寺の「寺号生起」は前文が正しく、後文は明治時代にコジツケてつくったものと思われる。そのころの住職時代は新出の古過去帳が埋没したままだったのでこのような作文をしたのではなからうか。

では、前文に登場してくる本阿弥光由は如何なる人物であるか？また、日定上人とは如何なる関係にあったのか？
茲に、光由の追跡はあとまわしとして、まず、日定上人について資料にみるかぎりのあらましを記しておこう。
日定について本浄寺由緒がきに述べてある個所を示すと、

吾が開山、諱は日定、喜見院と言ふ。俗姓を飲く。師は小西檀林の講主にして学徳兼備の人なり。寛文中、本山（小室山）十九世日桂上人は小室檀林、宝聚院の廃学を興隆せんと欲して師に譲るに本山の職を以てす。乃ち日桂の後を襲ひ廿祖の法嗣となり而して山内、唯定坊を檀林として以て自ら講主となる。学徒笈を負ひ来て学事大に振ふ。因つて後人、師を仰ひて檀林中興の祖とす。正保の末年、偶々微恙を感じ、職を日延（後、京、本國寺に累進。池原註）に譲つて此地に遊ぶ。然るに当地の里人、師の遊化を幸ひ一寺を創立して永く教化を乞はんとす。之を師に策る。師、里人の乞を容れ慶安元戊子年正月、当山を開き之に閑居す。其後、寛文八戊申年、本山に帰り同年正月十四日入寂す。（是れ口碑に因つて誌す）

右記録は入口碑に因つて誌す▽とあるから信憑性あるものと思われる。次に日定についての資料は、ちかごろ（昭和五十三年）発掘した日要上人（身延山廿四世）が日定に与えた一遍首題である。（本浄寺檀徒、深沢恒雄氏収蔵）この首題には左の割がきが添えてある。

元和六年三月一日△授与之学悦日定▽

顯是院日要上人は心性院日遠上人の高弟で小室山十一世を歴任後、身延廿四世の法灯を継いでいる。小室山から身延へ歴世したのは日要だけである。日遠の弟子だから身延へ歴世できたのであろう。それはとにかく、△授与之学悦日定▽とあるから日定は日要の弟子であったかもしれない。あるいは檀林を通しての学弟子であったかもしれない。

とにかく、日要も日定も小室山歴世となっていること、且、この一遍首題が示す師弟関係から推して両上人の關係は深い絆でむすばれていたことは間違いない。なお、鷹峰檀林初代の化主は日乾で第二代化主は日要の法弟、智見院日暹（宮樓那日暹）である。このかわりから推しても日定は鷹峰とも關係があつたかもしれない。

日定については、ひとまず以上に止め、次に本阿弥光由を追跡すると以下の通りである。

まず、光由は本阿弥光悦とかかわりある人物と推定、調査の歩を進めた。京都の光悦寺に依頼、本阿弥家の家譜圖を送ってもらつた。それによると光由の系圖上の位置は左のようであつた。

分家——光二——光悦——光磋——光甫

本家——光利——光徳——光室——光温

光的

。光由

光龍

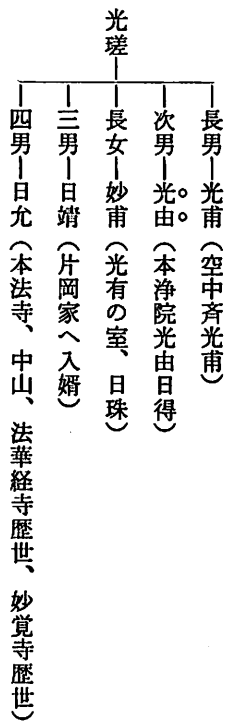
光山

この系圖には傍註が左のように誌してある。

本系圖は本阿弥十二家系圖、京都、本法寺所藏本阿弥家系、片岡氏藏、本阿弥系圖、東京谷中、妙法寺藏、本阿弥系圖、光悦寺過去帳等を参考として作成したるものなり。錯誤なきを保し難し。考究を要す。

この註によれば、東京谷中、妙法寺と本阿弥家の關係を知ることができる。私はあらかじめ妙法寺と連絡、ある日、該寺を訪れ、本阿弥家の墓域を調査した。

この折、私は妙法寺で本阿弥家の住所（東村山市野口町2—22—22）を教えてもらい、光悦直系十四代の末裔、本阿弥孝則氏を訪れ、その知遇を得た。同氏収蔵の家系図によると、光由は本家、光室の養子ではあるが、実は光悦の養嗣子、光瑳（光悦の父、光二の実家、片岡家から養子となる）の次男であることが判った。その部分を示すと、



右系図から「光由」は光悦の孫であることがわかる。

本阿弥孝則氏編述『光悦翁附録年譜』によると、本家の光室（光由の養父）は江戸幕府出仕中、急病で歿している。この折、光悦は江戸に下向、光室歿後のあと仕末をしている。光悦の孫、光由は光室の養子だからこのとき以来、あるいはもっとまえ、江戸の本阿弥家を代表して谷中に住居していた、と推定したい。谷中、妙法寺の過去帳は関東大震災の折、焼失したらしく、この面での光由追跡が不能のことは残念でならない。

さて、妙法寺、本阿弥家墓地には光悦と光瑳、光由、それに光瑳夫人、光由夫人の五霊の法号がハッキリ刻んである大きな墓碑があった。その墓は元禄ごろ特有の、舟型で左のようにきざんであった。

本浄院光由日得 元禄二年 巳 五月三日

清心院光瑳日喜 寛永十四年 丁丑 十月五日

妙法 了寂院光悦日子 寛永十四年丁丑二月三日

善澄院妙山日欣 承応三年甲午十月十二日

成等院妙淑日覚 寛永十六年己卯正月十一日

この碑にきざんである「本浄院光由日得」の法号と本浄寺新出過去帳に記載してある光由法号と歿年は全く一致、ここに光由の正体を確認することができた。いままで、光由の事跡がよく判らなかつた事由は、光由が寛永初年、あるいは元和中に既に江戸在住をさせられ、京都本家や光悦らとはなれた生活をしていたためではなからうか。

それはさて、この墓は光由の、江戸在住を証す有力な手がかりと、私は思う。また、この墓は光由の嫡子、光知がたてたとすることも不自然ではないだろう。光由の祖父、光悦、父、光璣の法号はきざまれているが、長兄、光甫（空中齊）の法号はみえない。このことは光由家の墓だからこそであろう。また、この墓が本阿弥家一族の墓碑群のなかでひときはめだつて大きく立派なのは何を意味するのか。光由は本阿弥一族が江戸移住まえのさきがけとして江戸の拠点を承り、その代表役を勤めていたからではなからうか。

本阿弥家があくまで京都を本拠としようとした意図は、光悦の強い願望であつたらしい。といつて、徳川の本拠、江戸もないがしろにはできない。こののつびきならぬ事情から、光由は江戸派遣の代表者となつたのではないか。光由が本家の養子になつたのはいつごろかは定かでないが、本家の人として江戸に乗りこんだ方がよろずおぼえよいため、そのような格付をしたのではあるまいか。いつてみれば光由はピンチヒッター的役割をはたしたのではないか。

このことについて、立正大講師、望月良晃上人の研究『京都町衆の法華信仰』（本阿弥光悦を中心として）論文中、左の箇所は注目に値する。

「光悦は、一族の江戸移住を禁止して次のように言っている。

△当時、関東憐愍、われわれが親類共、残らず蒙り奉るといへども、いつまでも王城に住居して、御用向の節は出府仕るべく、決して江戸御表へ引越の儀、ゆめゆめ有べからず。足利御代より禁裏様の御劔を清め、総て御用を勤め来り候事、なに程か難有ことにも候。関東の憐愍は海山よりも深しといへども、権現様当代にて漸く二代なり。ゆめゆめ禁裏の御用を粗末に思ふべからず。日本国中は神の御末にてみなみな禁裏様の物也（本阿弥行状記）▽禁裏様のおられる王城に住居して、御用を勤められようとする、京都町衆が自己の職業についてもっていた「家職」への自負の念と、あくまで政治的な舞台を離れて、芸術制作の場を擁護せんとする姿勢が見られる」

くだいようだが、本阿弥一族のこのような自負と見識を貫くためにこそ、光由が代表して江戸在住を承ったのではないか――。

いままで、光由の名が家系図中にわずかにみられるだけで、その他の記録にみあたらないのは、その本流から離れ住んだためと、江戸の重なる火事、それに関東大震災、戦災が追い打となり関係資料が散逸したことによると思われる。私は京都町衆の研究で高名な藤井学教授に光由について執拗なほど教えを乞うたが、判らずじまいに終わった。京都方面の諸資料に「光由」の名がでてこないのは、先述のように光由は若年のころ、既に江戸在住だったからと考えられる。このことを裏づけるものとして、谷中、妙法寺の墓碑や、拙寺の過去帳はいくらかの傍証資料となるのではないか。また先述の日定と光由が特別な間柄だったことも関東在住を印象づける事由となるのではないか。

次に光由の子孫の住居は谷中三枚ばしよこちようだったことがちかごろ判った。だから光由も谷中三枚ばしよこちよう周辺に住居があったように推定される。このことは嘉永七年刊行の『大成武鑑』（鎌倉・本阿弥宗景氏取蔵）に

記載してある。その個所を示すと、

兼次郎（光由系九代目）

百俵十五人ブチ

下谷三枚ばしよこちよう

なお、光由系子孫は島津藩（江戸屋敷）に仕えたようでその家系を示すと左の通りである。

光由―光知―光安―光寿―栄太郎―十郎兵衛―十郎兵衛―忠信―兼次郎―経三郎（和野）

次に、本年（昭和五十四年）講談社刊行の『日本古書蹟大鑑』（小松茂美監修）に光由の刀劍鑑定にかかわる筆蹟が掲載されたことを本浄寺護持会長、樋口幸之氏が私に知らせてくれた。光由筆蹟の出現を待望していた私は注目した。左の内容であった。

御状拝見仕候然ハ吉則（粟田口）之脇指見せニ被下候正真と相見へ申候。金巻枚五両程可仕と存候。其御心得可被成候段以貴面可申上候。恐惶謹言

霜月十二日

光 由 花押

私は本浄寺にとってこの筆蹟はかけがえない資料なので入手したいと希った。さっそく国立博物館美術課長であり、この『大鑑』を監修された小松茂美氏にその所在を問いたたした。ところが、この資料は十数年まえある骨董屋が博物館に持参した折、撮影しておいたもので今回紹介したとのこと。骨董屋が如何なる人物で、どこにいるか不明とのことだった。

この項のまとめとして日定上人と光由のかかわりを図にあらわすと左のようになる。

光由山本淨寺開山日定上人と本阿弥光由との關係図示

祖父
本阿弥光悦
寛永三筆ノ一
身延山、大野山、池上、
法華經寺、本法寺等ニ寺
額その他寄進。寛永十四
年二月三日歿八十才。

日遠ト光悦ハ親交深シ。

身延山二十二
心性院日遠
大野山開山
家康ノ側室、養珠夫人ノ
熱烈ナ信依ヲ受ク
寛永十九年三月五日化
七十一才。

父
光瑩
鷹峰檀林ノ創始者文
獻ヨリ推定スルニ刀
劔鑑定ハ光悦ヨリ秀
シモノノ如シ
寛永十四年十月五日

兄弟子
身延山二十四世
顯長院日要 小室山ヨ
リ身延山、瑞世
元和九年七月五日化。
四十八才化。

弟子
身延山二十六世
智見院日暹
慶安元年五月二十九日
化。六十三才化。

兄
「本阿弥行状記」著者
空中齊光甫（陶器名手）
天和二年七月二十四日歿。
八十二才

次弟
光由（本淨寺開基檀那）
元禄二年五月三日歿

弟子
小室山二十世 日要ノ弟子
カ？
本淨寺開山智見院日定
寛文八年一月十四日化。

弟子
日暹ノ弟子ナリ。
本通院日允
中山法華經寺、京、本法寺
妙覺寺歴世
元禄五年十一月十六日化。
七十四才

四弟

図に示したように光由の実弟が宗門史上に名をとどめた本通院日允である。今、『本化別頭統記』に記載してある日允の項を抜粹すると

京兆妙覚寺二十四代日允上人伝

師、諱は日允。字は玄通、本通院と号す。父（池原註。父ハ誤ナリ。祖父カ正シ）は本阿弥光悦、身延、遍公の門人也。中村談林玄義の講主となる。本法寺十八代の主となり、中山輪次の後、又、妙覚寺二十四代の主となる。父（祖父）光悦、筆翰の術有り。身延山通本橋の額字を書して、天下に名を馳す。師も亦、書法を能し、身延山祈禱の二大字を掲げ、筆力神妙、父（祖父）子分ち難し。晩に隱を鷹峰に築て、終に元禄五年壬申十一月十六日淹然として化す。寿七十四。門に人多し。後略

光由は元禄二年没だから、日允より三年前に世を去っている。日允がその三年後に七十四才だから、光由も七十才か、あるいは八十才近い寿命を保ったかもしれない。

(二) 甲州と光悦書の由来

現在、身延山には光悦筆「月づくし」の新古今集を貼った屏風二双が収蔵してある。また、身延に近い大野山本遠寺にも光悦筆の「本遠寺」の篇額と八十如是御書がある。篇額の裏には心性院日遠筆の由緒がきがるしてある。

この額は本阿弥光悦、先考、光二日寿、先妣、妙寿日量、離苦得楽の良縁のため、之を書し当寺に寄附す。以て報謝に備ふる者也（原漢文）

寛永第三丙寅孟秋如意珠日

日遠 花押

又、甲斐国誌、八十七卷、仏寺部に左の記録がある。

○箱原村（南巨摩郡鰍沢町）長見山、本能寺。日蓮宗身延末、大虚庵光悦、日允書を蔵す。

○平須村（南巨摩郡）、正徳山長遠寺、身延末。光悦、日要ノ書額アリ

このように、光悦の真蹟や篇額が現存、あるいは、いまは散逸しているが、かつてはあったことの由来を考察してみたい。

第一の理由は、鷹峰檀林の初代化主となった寂照院日乾（身延山廿一世）とその法弟、心性院日遠（身延山廿二世）、また日遠の弟子、頭是院日要（身延山廿四世）、智見院日暹（身延山廿六代）と光悦のかかわりが、その縁となった、と思われる。

第二の理由は光由の実弟、日允が日暹の弟子だったことが、甲州との関係を更に深めたように思われる。日定と光由の関係はあるいは日允を通して生まれたのかもしれない。日暹は日乾が鷹峰檀林初代化主を退いて後、第二代の化主となり、後、身延山の法灯を継いでいる。この関係からみて光悦とは深い交りがあったことは間違いない。こういった法脈、人脈の由るところが、光悦書が甲州にもたらされた機縁となったであろうと推定されるのである。

（三） 光悦村の意味について

本阿弥光悦とその系統が、日本の文化史のうえで、その名のようになり輝く芸術家として、大きな意味をもっていることは論をまたない。ところで、鷹峰あたりは、今日も光悦寺を中心に、本阿弥家一統の集団居住地域として注目され、その発祥について、歴史の意味が種々に考察されている。そして、これについて、近頃、かなりの見解の相違

があるようである。

具体的に言えば、鷹峰への集団結集は芸術的職業村建設という理由より、むしろ、日蓮宗系の特殊な事情が要因ではないか、という推論である。つまり、本阿弥一族と上層町衆の日蓮宗分裂分派の「不受不施派」への法党結束が要因ではないか、という考え方である。案外、こういった考えが一部の文化界に芽生えあるやにみうけられる。

例えば、某誌は、五十二年、四月号に本阿弥光悦特集号を編集しているが、そのなかで、加藤周一氏は「光悦覚書」、秦恒平氏は「太虚の光悦」を執筆、左のような見解を述べている。

加藤氏は「光悦の孫、日允上人が妙覚寺（かつて不受不施派の開祖、日奥が住持した）に入っているかわりからみて、本阿弥一族は不受不施派に共感をもち、同派と密接なつながりがあっても不思議ではないだろう」と述べ、続けて、但し、これはまだ仮説にも至らぬ疑問にすぎない。しかし、さしあたり私には調査する時間もなく、一つの感想として記しておくこととわってはいいるが。

秦氏の方は「本阿弥一族が不受不施の法華信徒であったこと、法華法難の思いを常に身に抱いていた一族法党だったこと、さればこそ、この集団移住を或る被差別者たちが手を取り身を捨て合い選び合った『意志表示』と見てはどうか」と述べている。

はたして、光悦一族はこのような立場と思想を抱いていたのか？

この点について、私はそう断定するのは、大きな矛盾があり、誤認と言いたいのである。光悦一族が不受不施派ではないか、との考えがもたれるようになった根拠は、加藤氏も指摘されたように、光悦の孫の日允（光瑩の末子、光由の弟）が不受不施派の開祖、日奥上人が、かつて住職したことのある妙覚寺へ入山したので、このことが誤解の因

となったのではないか、と思われる。とすれば、この問題は日允自身の宗門史的周辺を探渉すれば、おのずと明らかになることである。

まず、本阿弥家と鷹峰檀林のかかわりを述べ、光悦村の宗教的周辺をうかがってみることにする。

日蓮宗の有力檀林である鷹峰檀林は光悦の嗣子、光瑛が創始発願主となり、寛永四年、寂照院日乾を化主に招き、開創した学堂である。日乾は鷹峰に招かれるまえ、既に身延山廿一世の法灯を継ぎ、法弟、日遠（身延廿二世）とともに不受不施派と対決しつづけた学僧である。その日乾が自分のあと、鷹峰の第二代の化主として推挙したのが、光悦の孫の日允の師僧にあたる智見院日暹である。日暹もまた鷹峰化主から転じて身延山廿六代の法灯を継いでいる。つまり、身延山系は除歴処分をうけた日唱上人（身延四十六代。不受不施派に傾く）を除いては、不受不施派の立場を守りつづけたのである。

さて、本阿弥の日允は、先述の別頭統記の示す通り、本阿弥の菩提寺である京の本山、本法寺十八代を経て、千葉中山、大本山、法華経寺に輪番制入山をし、その後、京、妙覚寺廿四代を歴世したのである。ここに本問題に関する重要な鍵がある。というのは、日允は妙覚寺入山まえ、法華経寺でこの問題にかかわる事件を処理しているのである。問題とは、以下、述べることである。

日允が法華経寺へ入山したころ、この寺は池上、本門寺日樹らと提携、不受不施義に強く傾いていた。ために、日允は日乾、日遠、日暹とはかり、「不受不施義」を「受不施義」の立場から官に提訴、公場対決をし、遂に法華経寺から不受不施義を追放したのである。日允はこの事件処理後、輪番年次を終え、京洛に帰り、本山、妙覚寺の法灯を継承したのだ。不受不施派と公場対決までした日允が妙覚寺に入山したからとて、不受不施派である筈はない。本化

仏祖統記に左の記載がある。

元和中、寺門（妙覚寺）はからずも異端日奥の穢に遭う。身延、日乾公来って之を掃除す

以上の点からみても、鷹峰、本阿弥村は、宗教色の濃い芸術的職業村というべきで、特に被圧宗派者としての結東村ではなかった、と結論したい。